

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 春名 展生 印

学位申請者 Himawan Pratama（ヒマワン プラタマ）

論 文 名 Identity Discourse and Representations of Foreigners in Japanese Sports-themed Popular Culture of the Heisei Era

【審査の結果】

本論文は、他者の表象がアイデンティティの形成に欠かせないという前提のもとづき、平成期のスポーツをテーマとしたポピュラー・カルチャー作品に見られる外国人の表象が、どのように日本のナショナル・アイデンティティにかかわる言説の生成と変容に寄与したのかを考察した研究の成果である。

ナショナル・アイデンティティとスポーツの関係については、政府やマス・メディアの言説を対象とした先行研究は数多くあるが、新たな資料群として、これまでは看過されてきたポピュラー・カルチャー作品の価値と有用性を実証的に提示した点で、本論文は高く評価される。また、数十巻にも及ぶ長編漫画と1年間にわたって放映された大河ドラマを含む20作品の丹念な読み込みと、それを踏まえた緻密かつ高度に体系的な分析にも、その労力に見合う学術的価値が認められる。

審査委員会は、各審査委員による論文の審査を踏まえ、2023年2月20日に最終試験を実施した。二段階にわたる審査を総合的に判断した結果、審査委員会は全員一致で、学位申請者 Himawan Pratama が、博士（学術）を授与されるにふさわしいと結論づけるに至った。

なお、審査委員会は、春名展生（国際日本学研究院准教授）、Philip Seaton（国際日本学研究院教授）、友常勉（国際日本学研究院教授）、Iris Haukamp（国際日本学研究院准教授）、池田恵子（北海道大学大学院教育学研究院教授）の計5名で構成され、春名が主査を務めた。

【論文の概要】

本論文は、平成期（1989年～2019年）のスポーツをテーマとしたポピュラー・カルチャー作品を分析対象として設定し、そこに見いだされる「外国人」の表象が、日本のナショナル・アイデンティティにかかわる言説の生成と変容におい

て、どのような役割を担ったのかを考察した研究である。取り上げられた作品は、漫画 13 (14) 点、1つの映画、1つの NHK 大河ドラマ、そして歴史学習漫画 5 編であった。いずれも、FIFA ワールドカップないしはオリンピックにまつわるエピソードを内容に含み、また、大手企業によって制作・配給され、生産と消費の両面で「メジャー」な作品である。

まず、第 1 章は、関連する既存研究の批判をとおして、本論文の学術的な意義を提示している。ナショナル・アイデンティティとスポーツの関係については、政府やマス・メディアの言説を対象とした数多の先行研究があるものの、ポピュラー・カルチャー作品を資料として分析した関連研究は少ない。第 1 章は、このような研究の空白が指摘したうえ、カルチュラル・スタディーズの知見を手がかりとして、ポピュラー・カルチャー作品の分析が新たに開く可能性を説明しつつ、実際の作品分析を誘導する問いを下記のように設定している。

1. 外国人、そして外国人と日本人との関係が、どのように表象されているのか

2. そのような表象が、どのようなアイデンティティ言説を示唆しているのか、そして、そのような言説が、より広い社会の言説とどのように関連しているのか

つづく第 2 章は、第 3 章から第 6 章の作品分析が依拠する前提と、分析に用いられる諸概念を提示している。まず、ナショナル・アイデンティティは他者との違いにもとづいて構築されるという前提が、ナショナリズム研究の蓄積から導き出され、それを踏まえ、ナショナル・アイデンティティにかかわる言説は、外国人に対して自国の優位性を強調する“national-centric”な要素と、逆に相互の対等性を重視する“cosmopolitan-centric”な要素の双方を、多様な配合で抱え込むと説明されている。本論文は、外国人の表象に焦点をあてた 20 作品の分析をとおして、このような両要素の複雑な絡み合いを浮かび上がらせている。

第 3 章は、平成期の前半（1989 年～2004 年）に出版されたサッカー漫画 5 作品、すなわち、『キャプテン翼』シリーズ（『キャプテン翼 ワールドユース編』および『キャプテン翼 ROAD TO 2002 編』）、『シュート!』、『ホイッスル!』、そして『ファンタジスタ』を取り上げている。Jリーグが創設され、FIFA ワールドカップの日韓共同開催を見据えた時期に制作されたサッカー漫画においては、ナショナル・チームの国際的な地位上昇が主人公の究極的な目標に設定され、コーチやライバルとして登場する外国人との多面的な交流が挿入されているとはいえ、自国中心的な言説の生成と強化が基調をなす。

第 4 章も、前章につづいて平成期前半を対象期間としつつ、オリンピックにまつわる漫画 4 作品、すなわち、『YAWARA!』、『ガンバ! Fly High』、『奈

緒子』、そして『デカスロン』を分析している。オリンピックにおける国家代表としての勝利に主人公の究極的な目標が設定された本章の諸作品でも、外国人アスリートとの競争をとおして、自国中心的なナショナル・アイデンティティの強化が図られる傾向が看取される。

第5章と第6章では、対象期間が平成期の後半（2005年～2019年）に移されている。第5章は、第3章につづいてサッカーを主題とした漫画4作品、すなわち、『エリアの騎士』、『GIANT KILLING』、『さよなら私のクラマー』、そして『ブルーロック』を分析している。平成前期と比べ、国内サッカーの水準に対する自信が増しているにもかかわらず、それらの作品でも、相変わらずナショナル・チームの国際的な地位上昇が終極の目標に据えられ、外国人は、日本チームの強さと日本文化の優位性を際立たせるために登場している。

第6章では、漫画『オリンピアキュクロス』にくわえ、映画『ALWAYS 三丁目の夕日 '64』、2019年NHK大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック噺～』、そして歴史学習漫画5編が取り上げられている。いずれも、2020年に開催が予定されていた東京オリンピックを視野に収めつつ、1964年の東京オリンピックを回顧した作品であった。外国人の表象には濃淡があり、大会の国際性を彩る装飾として外国人を描いているにすぎない映画『ALWAYS』と歴史学習漫画5編とは違い、ドラマ『いだてん』と漫画『オリンピアキュクロス』には、より濃密で複層的な外国人と日本人の交流が描かれてはいるものの、それをとおして浮かび上がらされるのは、またしても日本文化の優位性である。

最後の第7章では、第3章から第6章にかけての作品分析が総括されている。本論文は、平成期の前半から後半にかけ、「スポーツ発展途上国」から「成熟国」へと日本の国際的な位置づけに関する認識の変化を見いだしているが、ライバルであれ、コーチであれ、あるいは観客であれ、外国人が、基調をなす自国中心的なナラティブを補強する要素として作品に挿入されている一貫した傾向を浮かび上がらせている。このような結果は、国際スポーツ大会に関連した作品という限られた領域の分析にとどまるとはいえ、本来的に「非公式」な性格を帯びているはずのポピュラー・カルチャー作品と政府が発信する自国中心的なナラティブとの親和性を例証しているため、ポピュラー・カルチャーの性格に対する一般的な認識の再考を促している。

【最終試験の概要】

最終試験は、2023年2月20日（月）の9:00～11:00にオンラインで実施された。学位申請者より論文の概要が説明された後、5名の審査委員から順次、個別に質問およびコメントが提示され、申請者との間で質疑応答がおこなわれた。

審査委員は、上記のとおり、ナショナル・アイデンティティ研究の資料として

ポピュラー・カルチャー作品の価値と有用性を実証的に提示した点で本論文を高く評価した一方、作品の分析方法をめぐって、次のような問題点を指摘した。本論文は、外国人表象の精査をとおして作品からナショナル・アイデンティティにかかわる言説を汲み取り、それを “national-centric” か “cosmopolitan-centric” かという基準によって評価しているが、このような二元論的な性格づけは、両極間に横たわる広漠とした中間領域を未整理のまま放置するにとどまらず、分析そのものの意義を損ねている虞がある。国際スポーツ大会を最終目標に据えた作品であれば、そこに至る過程において複雑な要素が入り込む余地があるとしても、ナラティブの基調は自国中心の様相を帯びざるを得ないためである。そこで、自国中心的な性格の有無を分析の結果として導き出すのではなく、むしろ取り上げた作品群を「国民のビルドゥングスロマン」の新たなジャンルとして提示するという総括の方法も考えられたというコメントも出された。

本論文を貫く日本人と外国人という登場人物の二分法も、分析の精度に粗さを残す。それは、日系ブラジル人や在日コリアンなどの多様な「外国人」を一くりにしているばかりか、ナショナル・アイデンティティの形成にかかわる他者の複雑性をも閑却しているといえよう。また、研究の実行可能性を確保するために対象期間を平成期に絞り込むのは妥当であるとしても、それ以前の歴史をも踏まえていないと、作品の解釈にあたって、作家の必ずしも正確ではない歴史認識が絶対視されかねない。近代日本のスポーツ史全体のなかに平成期を位置づけた場合、平成前期の作品に見られた「スポーツ発展途上国」という日本の国際的な位置づけは、テキストの解釈としては正しいとしても、再考の余地がある。

申請者は、本論文の学術的な貢献を適切に主張しつつ、その限界をも的確に把握したうえで、これから取り組まなければならない課題を自ら整理するように批判に応答した。最終試験と学位申請論文の審査とを総合的に判断した結果、審査委員会は全員一致で、学位申請者 **Himawan Pratama** が、博士（学術）を授与されるにふさわしいと結論づけるに至った。